

詩時評

第21回

之を好み信じ  
楽しむ、という風雅

松本衆司

小林秀雄の『本居宣長』より、次の箇所を引く。〈宣長が求めたものは、如何に生くべきかという「道」であった。彼は「聖学」を求めて、出来る限りの「雑学」をして来たのである。彼は、どんな「道」も拒まなかったが、他人の説く「道」を自分の「道」とする事はなかった。従って、彼の「雑学」を貫通するものは、「之ヲ好ミ信シ樂シム」という自己の生き生きとした包容力と理解力としかなかった事になる。彼は、はっきり意識してこれを、当時の書簡中で「風雅」と呼んだのであり、これには好事家の風流の意味合は全くなかったのは、既に書いた通りである。この文をかみ締める。今日の詩人たちは、同じ思想をこの時代社会の中で共有したい。〉

西野赤詩集「キャラヴァン・ノート」(「漂標」を読む。タイトル詩「キャラヴァン・ノート」を引く。)

新月の幕屋に／ふたりは 互いに髪を梳かし  
くちびるに蜜を塗る／／しかして／砂  
紋は もえあがる髪／蒼い砂丘の向こうへ  
水の畔にまでつづく／獣たちの憩う／砂  
粒は 解かれたものたちの骨／こぼれ落ち  
ていく／悲しみの地層へ／はじまりの水脈  
／けれども／殺し合わされた者たちは風砂  
／いまいちど血を流さなければ 購えぬと  
呻き／けれども／ながされた嬰兒たちは宙  
空／生きているとさえ／充たされているの  
だと／満天に瞬く

様々な試みを込めた「風雅」な詩集である。かつて七十年代に、詩人たちは何一つ他者に委ねることなく、マイナープレスとして出版のぎりぎりまで自らのスタイルに拘ったことを思い出す。装丁を含め、この詩集もまたそのようだ。詩人の知性と詩的感性の赴くままに現実を暴き、砂漠を行くが如く、魂との対話を続けた独創的な思索ノートでもある。

金春康之詩集『この世』(編集工房ノア)を読む。「過ぎた日」を引く。

悲しみは／野に忘れられた／かめの水のよ  
うに／とどまる／／どこへも行かない／癒  
されもしない／ただ／忘れられている／／  
ひとが死んだあとでさえ／悲しみは／かめ  
の中で／静かな空を映している

やはり、一人一人の心の中には深い湖のよ  
うなものがある。深い青の装丁に包まれた詩  
集の、そのような思いを確かに抱かせる一篇  
一篇の詩である。

浜江順子詩集『あやうい果実』(思潮社)を読む。「薄糊の同義語」を引く。

とん、とんと／ひたすらとん、とん、とん  
と／存在する／非在する／／いままさに死  
にゆく者も／いままさに生まれんとする者  
も／同じ湖の漣のうえ／世にも綺麗な正三  
角形を蹴破り／美しい目と／虚ろな目を／  
しゃぶりつづけている／／死にゆくことと  
／生まれんとすることは／どろどろする薄  
糊の中／同義語で／手、取られ／足、取ら  
れ／もがき／苦しみ／ぼん、ぼん、ぼんと、  
出る日を／うすぼんやりと／嘆くだけだけ  
の太陽とともに／本当は小さくぶつ、ぶつ  
音がする沈黙の中／薄れゆくまで数えてい  
る／／危うい蜻蛉も／せつない青虫も／何  
か発信してくる受動態をすべて蹴散らし／

無回転で生きているから／／そつとあの扉を／清め／穢し／そこから幾つかの小石を掴み取り／投げる先に／とてつともなく痛い風が吹いていても／／死にゆくこと／生まれんとすること／螺旋の羽根を持つ蝶のように／飛びゆく先の／何もない一片の光る雲に乗って

「生」を俯瞰する詩人の眼の卓越した世界観が織り成す詩集である。その一篇を引いたそれは、社会性を帯びた人間の感性の秩序の向こうにある。その「生」の根源に触れる詩に、今、奇しくも人類が直面するコロナ禍の現実が投影される。

服部誣詩集『そこはまだ第四紀砂岩層』（書肆山田）を読む。「七色の旅の思い出」を引く。

はるか西のほうにあるにじの駅まで／ざわめきながらのりおりする乗客たちにまじって／私はわたし自身にあいいった／南回り／いちにちがかりで／むらさき色のホームから下へ下へのびるエスカレーターに乗り／ようやく地表に着いても　そこはまだ放射能のこる第四紀砂岩層／砕けちった街のかけらが映る／ふかい山のなかの青空の　手鏡のような昼の月／あの日　七

色のダムは貯めていた夥しい過去を放流していた／轟轟とひびきわたる死者たちの声／虹色にひかる水しぶきの底からひそかに私を見あげているものたち／カーテンのない安宿の　窓のむこうに見えていた灰色の夕陽／私はいったい誰を待っていたのか／すりきれささくれだつた畳の中へ沈んでゆくわたし自身の輪郭を抱いて

十分に現実社会を社会人として生きてきた詩人の豊かな感性によって紡ぎ出される詩は、幻想というフィルターを通して、人間を、そして社会を、そして生きるという切実感をさり気なく巧みに描く。

出版社について触れたい。書肆山田から出される本はいずれも格調があり、好感がもてる。その制作に手向ける気品が嬉しい。

森哲弥詩集『少年百科箱日記』（土曜美術社）を読む。「輝くひとみ」を引く。

南米から一三〇〇キロを／ひたすら歩きつづける／屈強な男たちもいるが／乳飲み子も／老人も／少年も／身籠った女も／病人も／さまざまな事情を抱えた人たちが／北をめざして歩いている／ゆく先で待っている人はいない／俟っているのは冷たい銃口だけだ／銃構えるものたちの統率者

は／聖書に自らの手をおいて／宣誓したブレジデント／弟の肩に手をおいてやさしく歩く少年／彼の誓いは弟を守ること／彼はきつと夜が好きだ／果てしなくくらしい悪路のあゆみのなか／星々の光がとどいて／少年の双眸の輝きが増すことを／彼は感じるからだ／苛酷な暮らしから逃れて／ふくらはぎが張る一三〇〇キロ／食べ物も水も乏しい／銃口と銃口のあいだに通う細い風の筋／人々はその風のおいさを察しねばならない／そして風の道を見つけてあゆむ／それでもやがておとずれる胸と胸との衝突／そのとき少年のひとみは／なお輝きをましているだろう／この人々を導くのは自分なのだろうか／弟の背を撫でながら／少年はふと思つた／足もとの砂が風にすこし舞つた

詩集は四つの箱に区切られている。右の詩は二つ目の箱に収められている。人生を経て様々な現実と向き合ってきた詩人に未だ少年の眼差しと心が潜んでいる。いずれの詩もその経験と未熟の結実として尊い。

木澤豊詩集『燃える街／羊のいる場所』（草原詩社）を読む。「べらぼうな」を引く。

だれも歩いてやしねえ／おれだけ／国道

の側溝っても 枯れたドブだが／ぎっくり  
 しゃっくり 歩いてゆく／又こぶ山が 仄  
 いろにかすむ／じつに上々天気で／壊れか  
 けた工場を区切る溝に／赤い野花 黄色い  
 野花がひらいて／ただしくは いろいろ名  
 をもっているが／どうでもよくなっている  
 ／テッド・グサ アキノノゲシ ヒメジ  
 ヨオン／ブタクサ スイバ ツメクサ ス  
 ベリヒユ／など／咲いたり枯れたり  
 咲かなかつたり／車の埃をかぶって煤け  
 ちぢれた／花は な／咲いているだけ／  
 歩いても走っても どころ ほこり舞い踊り  
 ／とおく二上山もかすんでおる／そうだつ  
 た オルという織り人が麓に住んでいたが  
 ／いてもいなくても オルはいる／ひと  
 り 歩いていく／そのひと／やまと葛城  
 の地図を見ると／それだけが わたしと  
 言えるか／名をおとしてきたひとが／颯爽  
 金っ気くさく鎖くさい工場町へ／疾風／  
 べらぼうめ

名もない情景が真実である。詩人はそこに  
 溶け込むようにその情景を描く。そのため、  
 逆説し、揶揄し、反逆し、倒錯する。そこに、  
 陳腐に分節された現実が露呈し、詩によって  
 名もない情景へと淘汰される。木澤豊は、真  
 実を求め続ける詩人である。

刈田日出美詩集『草茫茫』（七月堂）を読  
 む。「ひよいと」を引く。

ひよいと／むこう側へ転がってしまひそう  
 な 朝／暖房のリモコンをONにして／パ  
 ジャマを脱ぐ／そういえば／ぶつりと  
 切断された時があつたわ／あの時ひよいと  
 むこう側へ／行きかけたつけ／帝王切開  
 術のために全身麻酔をされて／気がついた  
 ときには何も覚えてはいかなくなつた／夢をみ  
 るとか親しい人の声を聞くとかいうことも  
 なく／数時間は空白で／そのまま 向こ  
 う側へ転んだら／なんにも無くて／白紙の  
 ようなものがプリンターから／エンドレス  
 に出てくるのかも／ねむい眼をこすりな  
 がら ひよい ひよいと／キッチンに降り  
 てきてパンを焼く／こちら側の／いつもの  
 朝

世界には「むこう側」と「こちら側」があ  
 るという。刈田日出美は、二つの世界を俯瞰  
 する位置に一旦立つ。そして、そこから降り  
 てきて、詩が生み出される。だから、その詩  
 は思い出のようにしみじみと沁みてくる。

岸田裕史詩集『水のなかの蛍光体』（思潮  
 社）を読む。「甘い果実の臭い」を引く。

埃をかぶり放置された変圧器のなかから／  
 甘い果実の臭いが洩れている／透明で粘液  
 質の／ポリ塩化ビフェニルが静かに息をし  
 ている／この臭いはこの世に存在しないも  
 の／古い記憶のなかに残された裏側の臭い  
 ／ハイドロカーボンにつつまれ／変圧器に  
 押し込められた臭いのなかに／昔の狂気が  
 埋もれている／誰も知らない空間のなかで  
 ／揚液にまみれた発光色素遺子が動いて  
 いる／遠くに見える蛍のような輝き／ぼつ  
 りと光り／すぐに消えてしまう多環芳香族  
 炭化水素類／この臭いに魅せられては遠ざ  
 かり／なんども忘れようとした／残された  
 有機物は忘れられたことをよるこび／自ら  
 の因果を封印してきた／吹き消されるよう  
 に これから先／無いものとして在りつづ  
 ける甘い果実の臭い

現実と非現実、過去と未来、その皮膜の狭  
 間で「思い」は生息する。時に心の奥深く、  
 さまざまな襲から湧き出る思いもある。その  
 不可思議な思いを世界化し描写する。岸田裕  
 史は生業とした理系用語を駆使し、その思い  
 の世界化を巧みに試みる。

塩峯緑詩集『庭園考』（書肆山田）を読む。  
 「庭はだれのもの」を引く。

土を均し／煉瓦を並べ／花壇を拵え／／美  
のなる木／風と話す木を植え／／円卓に布  
をかけ／紅茶を飲み／晴天の向こうがわを  
眺める／／柑橘を蝶は好み／トネリコを蟬  
は愛し／座りの良い枝ぶりに／鳥は巢をか  
け／／私のいない時間に／草木は伸び／／  
花木は／老いながら蕾をふくらませ／鳥は  
卵をあたためている／／庭はだれのもの

詩集を最後まで読み終え、引用する詩に迷  
った。そういうことはあまりない。どの詩に  
も心魅かれ、その上質の時間に心を遊ばせた。  
詩に描かれた風景にはさまざまな営みの時間  
が込められて在る。ふと、「聞き耳頭巾」の  
ようなものがほしくなった。

四辻貴子詩集『Pretty Girl』（濛標）を読む。  
「夢」を引く

薬を飲まずに暮したい／／朝 目覚まし時  
計で起きて 出勤する／何でも良いから仕  
事して／一人で良いから親友がいる／きち  
んと毎日お風呂に入つて 歯を磨いて／オ  
ムツをせずにトイレに行きたい／／三十五  
歳の女性らしく 普通の暮らしがしたい／  
今の私は家から一歩も出られないから／煩  
わしい人間関係に疲れたりできない／／虐  
待されずに育ちたかった／小中学校で 勉

強をしたかった／友達が欲しかった／／ア  
ル中で母を 轢死で兄を 孤独死で父を／  
亡くした記憶を消したい／自殺したい気持  
ちを無くしたい／体を汚した記憶を消した  
い／／強くなりたい

彼女の別の詩に、「それでも 自分は何で  
ありたいか／突き詰めれば／詩人でありたい  
／詩人でありたいと／もがくのです」とある。  
私は今朝、聖書で、キリスト磔刑のくだりを  
読んだ。再生の祈りを彼女にも捧げたい。

中塚鞠子「我を生まし足乳根の母」物

語（深夜叢書社）を読む。文学者二十人の  
「見えない母と子をつなぐ不思議な回路」  
（倉橋健一帯文より）が描かれている。その  
あとがきにこうある。

母が亡くなったのは、私が結婚した翌年で  
あった。私は母三十歳のときの子で、兄、  
姉、姉と続き私は三女である。小学校の教  
師をしながら三十歳までに四人の子を産ん  
でいる。すでに十五年戦争に突入していた  
から、若い男の先生は兵隊に駆り出され少  
なく、勿論産休などなかった状態でも、病  
気になる以外、教師を辞めることはできな  
かったという。嫁ぎ先での嫁としての仕事  
もこなさねばならなかった。愚痴を言わな

い人だったが、子守りさんが連れてきた赤  
ん坊に、休み時間に宿直室でお乳を飲ませ  
た話をふつと漏らしたことがある。／私が  
生まれたときはさすがに教師は辞めていた  
ようだが、仕事を辞めても舅、姑に仕え、  
畑仕事や家事（多いときは祖父・祖母・  
父・母・弟が生まれ子ども五人の十一人家  
族）が待っていた。これくらいの仕事は、  
茂吉の母守谷いけなら、平気でこなしてい  
たかもしれない。が、母にはそんな生活に  
満たされないものがあつたのであろう。夜  
遅くまで本を読んでいた。（略）

改めて男女問題を考える。かつての社会や  
人々の暮らしはこのような女性の様々な犠牲  
のうえに成り立っていた。そして子どもたち  
はなんらかの犠牲の余波を被り、自身の生き  
方を模索した。あえて言えば文学芸術はその  
所産でもありえるのだ、彼女がそうであるよ  
うに。今日、社会のジェンダーギャップ意識  
の成熟（まだまだ未成熟ではあるが）によつ  
て母親像はどのように変容し、文学芸術はど  
のような余波を受けるのか、興味深い主題だ。

今回より《詩誌評》は右の中塚鞠子さんの  
担当となりました。今回取り上げたい詩誌も  
ありましたが、心にとどめます。今まで拙い  
詩誌評をお読みくださり、感謝致します。